



Title	セクシュアリティにおける「語りにくさ」の問題
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2000, 6, p. 4-8
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

セクシュアリティにお



「語りにくさ」の問題

——「セクシュアリティに臨む哲学の集い」からの報告

栗田 隆子

はじめに——

——セクシュアリティに臨むということ

大阪大学・臨床哲学の有志が集まったこの会の名前は「セクシュアリティに臨む哲学の集い」、というものであり、略して「セク臨」と呼んできた。「研究会」としなかったわけは、セクシュアリティをいわゆる研究の対象とし、厳密に定義することが目的ではなかったからである。セクシュアリティに哲学が(哲学、とあえていわなくても、シンプルにわれわれが、と言うほうがふさわしい場合も多い)「臨む」場所として、この集まりを参加者がとらえていたからである。これは「セクシュアリティに臨む哲学の集い」の場でおきたこと、感じたこと、話したことの報告である。最初に二つおことわりしたいことがある。ひ

とつはこの報告が、その場に起きたことに焦点をあてて書いていることにより、そこに参加をしていなかった人が読むと「わからなさ」が積みまとうだろうということである。なにがそこで問題になったのか、どうして「語りにくさ」にこだわるのか、などなど疑問が湧くことだろう。しかし、その「わからなさ」につきあい続けて頂くことによって、読み手が振り返って考える「契機」のひとつとなればと思っている。さらにまた「わからなさ」自身もその契機の一つとなれば幸いである。もうひとつはこの報告を私(栗田)がするというの意味である。この報告はあくまで私の視点で切り取ったものである。けれども、これを「会」の報告として表現したいがゆえに「私」の視点をことさらに強調することはやめたい。なぜなら、私の「考え」そのものが、

この集まりとは切り離せないからだ。私の考えはこの集まりに参加したメンバーに触発されて生まれたものだ。私が会を「代表」して語りたいわけではなく、いわゆる「客観的」に表現するために「私」を出さないというわけではない。むしろ打ち出さなくともじみでてしまう「私」の存在があることを読みとっていただけたら、と願う。

さらにこの報告を書くということもまた、セクシュアリティに臨むという行為そのものとして表現していきたい。

1. 頓挫の歴史——

——「セクシュアリティに臨む哲学の集い」から

セクシュアリティに臨むといってもなにをしたか、ということを書きたい。この集まりを2年前にはじめた時点では、とにかくセクシュアリティ（と思われる領域）についてお互い「語る」ことが必要と思われた。映画や、小説などに描かれているものについて語ろうという話もあったが、もっと身近なもので、抽象的なものでなく具体的なものについてざっくばらんに話し合おうということとなった。そこであるメンバーの発案によ「自分にとって性的と思われるもの」をそれぞれが持ちより、去年（1999年）の4月に第1回会合を開いた。

この案の意図はセクシュアリティについて具体的なものを目の前にしながら、それにまつわる「自分」を語ることにより、世間で流布されているような言葉をただ反復するのではなくそれぞれ身の丈にあった語りを行うことが目標であった。しかし、この目論見がセクシュアリティの語り口に対する模索の

始まりであったし、そして頓挫のはじまりでもあったといえる。つまり、この第一回目の会合でセクシュアリティにまつわる「私」を出して話すということ、さらにその出された「私」に対して聞く姿勢をとるといってそのものに対し、実に、メンバーそれぞれが「うまくいかない」という感覚を抱いたのである。はっきりいえば参加者は「語れなく」なってしまったのだ。参加した私自身も最初この「うまくいかない」という感覚がどこからきているのかわからなかった。つまり「何のためにこれを話すのか」「誰のために」「どんな目的で」ということはあいまいなままでよいと思っていた（少なくとも栗田は）のだが、ことはそんなに単純ではなかったことに、この「違和感」によって気づいたのだった。持ってきた「もの」に対する違和感があってもそれを口に出していいのかどうか、という危惧が参加者のなかで空気のように生じたのだ。もしくは一人が抱いた危惧が敏感に伝わったといってもいいのかもしれない。

たとえばあるひとがもってきた「ペットボトル」が目の前にある。しかしそれが「性的なものと他の人には見えない場合それを「性的に見えない」とストレートに伝えてしまっているのか、という戸惑いといったら、その「違和感」がわかりやすくなるだろうか。一人が違和感を覚えれば、（即座に感じるというのではないにせよ、多かれ少なかれ）みんなが違和感を覚え、誰の違和感とも言えないような、独特の雰囲気共有していくことになったのである。

セクシュアリティについてもっと「直接的」に語りうると思って会合を開いたのだが、実際は、このメンバー（の個々人のセクシュアリティ）・研究室・大学、といった条件が語

りを制約したのだ。さらに「セクシュアリティってこうよね」といった誰が言ったともわからない「世間的」な言説を反復することは、その「世間」的な差別の構造や態度をも反復することになるゆえに、避けたいと考えていた。このセク臨で語ることにより、そういった世間的なセクシュアリティにまつわる言説の「語りなおし」をしたいという意図もあったのだが、しかし、それもこの会合にまつわるさまざまな条件によって制限された。それゆえこの文章のテーマであるセクシュアリティにおける「語りにくさ」という問題にぶちあたらざるをえなかったというわけである。

メチエ第一号（1998年出版）で本間直樹さんが以下のように書いている。「主観的なものであれ、客観的なものであれ、セクシュアリティについての“純粋な記述”はありえないのではないか。むしろセクシュアリティについて語ることによって『語る主体』なるものが常に逆照射されるのであり、そこにこそセクシュアリティについての語りにくさが起因するのだ」という状況を、（本間さんも含んだ）グループ全体で、単なる「ことば」ではなく身をもって感じざるをえなかったのだ。そこで、第二回目以降の会合では、「私」ということばを出さず、みんながセクシュアリティに対して等距離で語る方法、しかし、（先ほども書いたように）世間で流布される語り口の反復を避ける方法はないかと再び考えることとなった。そこで「私」という主語を離れて、簡単で抽象的な言葉を出しながらその言葉をカードに書き、どの言葉と言葉が関連するか結びつけるという「ワークショップ」のような「作業」をした。しかし、この図をつくるという行為は、ことばでセクシュ

アリティにまつわる「私」についていろいろと説明をしないとしても、結局「私」というところから逃れ出ることはできない。たとえば例をあげると「セックス」という言葉に「暴力」という言葉をつなげたとする。それを「つなげる」ということはその人の性のありようを示すことになり、「賭け」となる一方、それに「違和感」を覚えた場合、それをストレートに伝えるべきかどうか迷いが生じるということも想像に難くない（セク臨で起きたことはほぼこれに近いことである）。ともかく、この「セク臨」のなかではその図を動かすことも、その図について話をするとも「できない」という事態となった。

セク臨のなかにおいて、セクシュアリティを「経験談」としては語れなかった。さりとて一般的な「分析」をするような言説もそぐわない。しかし「語り」を棄てるということも、できない。それは「哲学」だからという答えよりもむしろ、すでにセクシュアリティが「語られてきた」ものであるならば、語りを棄てるということは、その今までの語りの持つ構造を追認するということにつながりかねないからだ。

語りの方法を探しあぐねている折、'99年秋号で紹介されたソクラティック・ダイアローグ(S.D)を経験したものがメンバー内にいたこともあり、このS.Dを応用してセク臨内部でそれぞれの経験に基づいた性にまつわる事例を語った。これは一定の成功を得たといえる。特に語り手の立場に立ったものは「聴きとってもらった」という安心感があった。また個人の体験をもとにそれをみんなで聞くといったその個人に「かかわる」かたちで話をすることもできたし、さらに個人の事例を聞くということもある一定の方法に基づいて

行うことにより、聞き手にとっての不安感や危惧なども少なかったという参加者の感想もあった。しかしS.Dはメチエでも紹介されたように、非常に時間をかけて一人の話を聴かなければならず、また語り手もその経験を語る余裕を持っていなければならない。「どのような事例」についてもあてはまるわけではないのが、S.Dの特徴でもあり、そのような語りの限界（時間といった物理的な限界も含めて）を常に意識している必要はある。

2. 授業での発表

セクシュアリティの語り口についての模索が続くなかで、「セク臨」がなにをやってきたか、ということ一度、臨床哲学の授業のなかで発表することになった。セク臨のメンバー3人が、セクシュアリティにおける語りという共通の問題からさらにそれぞれの関心をもとにして、「ウーマン・リブの問題意識から」「多様な性を語るということ」「ゲイについて」というテーマを掲げ、発表をした。

この発表は臨床哲学の授業の中で「セクシュアリティ」ということが正面から取り上げられたということで、ひとつの実験的な試みであったといえる。その試みそのものは、それなりの意味があったのでは、と発表者の

一人として思う。が、その実験とは、セク臨のメンバーが今まで、会合のなかで感じてきた、セクシュアリティについて語る際の難しさ、聞く側の居心地の悪さ、などを授業に参加した人々が感じたということにほかならない。メンバー三人はなぜ私が、ウーマン・リブや、多様な性、そしてゲイについて語るのかという「理由」を説明しなかったことから、たとえば「何故ゲイについてはなしをあなたはするのか」という違和感を聞く側が覚えたり、また、「どういうふうに質問をしたらいいのかわからない」という戸惑いを感じたり、という事態が授業の中でも実際に「必然的」に生じてしまったのだった。

授業の終わった後に、ひとりの参加者が「やはり、授業のなかでセクシュアリティについて語るということはあまりふさわしくないような気がする。とはいえ、一杯酒を飲みながら話すということがいい語り口とも思えない。〈××ではない〉、ということがまず先にあげられるのだけれど〈こういう語り口がいい〉ということが、なかなかいえない」という感想を述べていたことを、一言付け加えておきたい。

おわりに——

セクシュアリティを語るとは何であったのか
そしてこれから

実はここで、大事なことをオープンにしておこうと思う。この会は進んでいくうちに、(いわゆる読書会などでもメンバーの変動はよくあることで、普段は特筆すべきことでもないが)メンバーの変化、減少があったことである。このようなことをなぜあえて書くのかといえば、それこそがセクシュアリティに



ついて「誰とでも話そう」とはならないし「誰にでもあった語り口」というものが簡単に見つかるわけでもない、ということを証明しているであろうからだ。語りそのものが、ある種の政治的な実践にほかならない。抜けた人がいるということに残念、という気持ちもあるし、それこそ「セク臨」に足りない何かだったのだと思う。ただ、その限界が浮き出されることが重要なのだ。

「どのような仲間」といっしょにいたいと思ひ、どんなふうに性を語りたいのか。セクシュアリティにおける語りがそこからはじまるということへの気づき、これが少なくともわたしがこのセク臨に参加したということの成果だった。セクシュアリティを語ろうとすることにより（もしくは語らず黙っているとき）、そのメンバーのありようが、どうやっても浮かび上がってきてしまうのは残酷で、暴力的と言える。しかし、そこにはある種の「快樂」が裏面に張り付いているともい

える。それはまさに語る相手を「知る」という契機につながるからだ。また、セクシュアリティを「探求」するべく、その語り口を模索するという学問的姿勢がセクシュアリティ（とみなしているもの）を考え語る際に、あまり意味がないものだという実感も参加して分かってきたことである。もし「セクシュアリティ」の探求に意味があるとしたら、学問的・普遍的な語りが前提としているものを明らかにしていく、ということなのかもしれない。セクシュアリティの語り方は「こうである」ということを定義していくのが目的なのではなく、どのように、誰と語りたいのかという「かかわり」の問題として浮かび上がってくるのだ。その「かかわり」の言葉が「科学的な言説が捨象し無前提に肯定しているもの」を浮かび上がらせる。言葉を発すればそ

